

富貴原章信先生を偲ぶ

略 歴

明治卅年八月三日 愛知県葉栗郡木曾川町に出生

昭和六年三月 大谷大学卒業

昭和六年五月より
昭和六年七月まで 法隆寺勸学院にて唯識並びに俱舎教学研究

昭和七年四月 大谷大学専門部教授嘱託

昭和九年四月 大谷大学文学部教授嘱託

昭和十三年五月 真宗専門学校教授兼幹事

昭和十四年四月 大谷大学文学部講師

昭和十五年四月 東海同朋大学助教授兼学務部長

昭和十六年四月 大谷大学短期大学部講師

昭和十七年四月 大谷大学短期大学部教授

昭和十九年九月 大谷大学学生部長兼任

昭和三十年十月 授文学博士

昭和三十年十月 大谷大学教授

昭和三十年四月 大谷大学図書館長兼任

昭和卅五年三月 大谷大学退職

昭和卅六年三月 大谷大学教授委嘱

同年 四月 逝去



富貴原章信教授と唯識学

横 超 慧 日

永らく大谷大学で伝統ある唯識学の講座を守ってこられた富貴原章信氏が、昭和五十年五月十五日、六十七才を以て忽然として長逝せられた。私は年令接近し且つ同郷の出身であると共に、三乗仏教と一乗仏教との別はあれ、ともに中国日本の仏教を主として学ぶ間柄であったために、公私共に多年交友をつづけ啓発せられてきた。しかしそうした私的な関係は別としても、氏がかくれない古典的な南都法相教学の伝承者であったことを思えば、今日の日本仏教学界において屈指の貴重な学者を失ったことに無限の寂寥を感じないではおれない。長い間の交際に拘らずあまり自分のことを口にされなかったので、私はどうして氏が唯識学に一生をうちこまれるようになったかその間の事情を聞くことができなかった。しかし富貴原氏といえ、巨軀を擁したあの悠然たる風貌と同時に、学問上では唯識ということをいつでも連想しないではおれぬのであるから、その逝去せられた今になって私は私なりに同氏と唯識学との結びつきを推察してみたいと思う。

富貴原氏が本格的に唯識学にとりくまれるようになったのは、昭和六年に大谷大学を卒業し卒業後ただちに内地留学生として法隆寺の勸学院へ入られた時にはじまる。法隆寺では帝国学士院の会員たる佐伯定胤師の下に厳正な唯識教学の講習が続けられていたから、これより前に今京都女子大学の学長である結城令聞氏の

如きがここに学ばれたこともあった。その他にもここに学ぶ研究者が外部から来て、正に法隆寺問寺の実態であった。富貴原氏はそれ以後、昭和十八年十一月まで実に十二年半にわたってここで性相学を学ばれた。こうしたわけで後年同氏が唯識学の多くの業績を挙げられるようになるための基礎は、実にこの修学時代に養われたこと言うまでもない。それでは、初めに学問の対象を唯識に定めたことと、修学場所として法隆寺を選んだことと、この二つが現実化するためにその背景にはどんな事情があったかというに、これには近因・遠因の二つが考えられると思う。

初めに近因としては、当時大谷大学に唯識学を専攻する小島恵見という教授がおられて、それが同郷の出身であったということ。これが青年富貴原の心を動かしたのでなかるうかと考えられる。富貴原氏は愛知県葉栗郡木曾川町定力寺の人。小島恵見教授は同じく葉栗郡（今では一宮市）浅井町頓受寺の人で、今の同朋大学長小島淑成氏の敵父である。小島教授は大正元年から八年まで真宗大谷大学で教授の職にあり、その後十年ほどの間名古屋の真宗専門学校（今の同朋大学の前身）の教壇に立たれたが、昭和六年の五月から再び大谷大学の教授に復帰せられた。だから富貴原氏は大学で小島教授の講義を受けられることはなかったはずであるが、このように唯識学教授の就任と唯識学留学生の派遣という二つの出来事が、大谷大学の中で同年同月に起ったということ偶然でないものがあつたようである。私は自分が赴任してきた昭和二十四年以前のことは大谷大学の内情に因て全く知る所がないけれども、仏教学としては天台・華嚴・唯識・三論の四つの

中国仏教学を学習させるといふいわゆる余乗の伝統があったために、その余乗の中でも性相学の振興を図るため唯識学者の養成を期することが大学当局の念願となっていたのでないかと思われる。しかるに、新編成唯識論を出版せられたのを初めとして多くの著述や研究を発表し、大学では成唯識論の講読と唯識思想史の講義とをつづけてこられた小島教授は、昭和十二年十二月に脳溢血で急逝せられた。そうなるに富貴原氏にかけられた母校大谷大学の期待はいよいよ大きいものとなる。早速昭和十七以後教授嘱託として迎えられることになり、その後途中で四年間ほど真宗専門学校に勤められることはあったが、ついに前期の如く昭和二十七年から大谷大学へ専任の教授として来られることになったのである。

次に遠因としては、唯識学の若い学究にして早く世を去った郷土の大先輩、瀬辺惠燈氏の影響が十分考えられることと思う。これについては些か関連事項の説明を要する。富貴原氏は法隆寺の佐伯定胤師に師事されたが、その定胤師は京都泉涌寺の佐伯旭雅和尚の弟子であった。旭雅和尚は性相学の泰斗として明治初年に一世を風靡し泉山教学の名を高からしめた碩学である。当時各宗の学徒が競ってその門に学んだ。私の父日南の如きも、明治十八年頃からずっとその講席に列していた。然るに和尚の門下には師を助けて、和尚の著述には必ずといってよいほど貢献した二人の門弟があった。一人は杉原春洞であり、一人は瀬辺惠燈であって、共に真宗大谷派の青年僧である。長らく性相学徒の間で机上から離すことのできぬものとされてきた冠導本の俱舎論と成唯識論と

は、法蔵館の出版で編輯者は佐伯旭雅、勘文者は上記の二人である。冠導本の三国仏法伝通縁起にしても泉涌寺比丘旭雅律師の校閲の下に真宗准学師たるこの二人の注解に由つてできたものであった。その他和尚の名著である俱舎論及び成唯識論の名所雜記にもその名が見えている。二人の中の杉原師は美濃の出身であるが瀬辺師は尾張の人で、富貴原氏の家に近い中島郡（今は一宮市）奥町は泉寺の出身であった。奥町は小島教授の浅井町、富貴原氏の木曾川町と共に、いづれも尾張の最北部で木曾川に沿った近接の地域にある。そして杉原春洞師は後に滋賀県愛知川の宝満寺に入つて豊満の姓となり、瀬辺惠燈師も後に滋賀県木之本の明楽寺に入つて藤谷姓となられた。ところが惜しいことにこの藤谷惠燈師は師の旭雅和尚が逝去された明治二十四年から五年後の二十九年に三十七才で早世してしまわれたので、富貴原氏はもちろんのこと小島惠見教授にしても生前の惠燈師に逢うことはできなかったに違ない。とはいへ、よき師を見出して若い青春時代の精力を学問一途にうちこんだ郷土の先輩の名は学究者の心を刺戟し、仏教を学ぶならば唯識を、唯識を修めるならば旭雅和尚の門に、というように深く脳裏にしみこむものがあつたに相違ない。富貴原氏が内地留学の目的地として旭雅和尚門下の佐伯定胤師がおられる法隆寺を選ばれたについて、私は以上のような事情があつたものと推察している。

富貴原氏が法隆寺へ留学していた間に、法隆寺では新たに成唯識論の定本を刊行しようということが計画された。性相学聖典刊行会が設立せられ、定胤師を監修とし佐伯良謙師以下五人の学徒

が編集に当たった。その五人の陣容の中に富貴原章信氏が入っていたことは云うまでもない。がんらい唯識学は奈良時代に伝わった南都法相宗の学であるから、正統はどこまでも我に在りという法相宗徒の信念がある。しかるに近代になると、地方でもまた他の諸宗の中でも伝承に拘束されず、自由の自主的態度で唯識を研究するようになってきた。結城令聞氏は、「江戸時代における諸宗の唯識講学と其の学風」という論文の中でその実態を詳しく紹介しておられるが、それによると中でも真言宗の智山・豊山の両派が極めて優勢で、一方華嚴宗には鳳潭、浄土宗には普寂の如き巨匠が出、真宗の東西両派でも競ってこれを学んだので、それらが互に特異な学風を發揮した。結城令聞氏著の「唯識学典籍志」を見るとそれが一々実地に当って調査されており、例えば大谷派の歴代講師の中にも唯識を他宗に学び多くの労作の著述を遺している人が少なくない。かようなわけで、旭雅和上の如きも初め泉浦寺に住し後に随心院に移られたが、ともかく真言宗の人であって唯識法相宗の正統を継ぐ人ではない。そうなると、今でこそ聖徳宗と名を改められたけれども久しく法相宗の本山であった法隆寺としては、肝心の唯識を学ぶのに他山で作られた冠導本の成唯識論を依用するというのでは、本意でないということになる。法隆寺が法相宗正統たるの面目にかけて成唯識論の定本作成に着手した裏には、そうした意味があったものと思われる。正統を示すためには慈恩大師の述記を初め三箇の疏を対照して正義をたどり得るようになければならぬ。そこでそれらの流布本を厳正に校正しつつ、頭注、傍注、科文、索引の充実した一部の書にまとめ

たのであって、かくして出来たのがいゆわる新導本と称される成唯識論である。それが発行されたのは昭和十五年であるから、その編纂事業がすめられたのは正しく富貴原氏留学期間中のことであった。氏はこの画期的大事業に参画することによって努力に酬いる学識の蓄積を得たのであり、後年の数々の著作の根柢はこの間に築かれたものと言ってよいであろう。

富貴原氏の学位論文は護法宗唯識考であった。又その後の研究は日本唯識思想史を本領とせられた。そこに南都の伝統教学を相承する真面目がうかがえる。晩年には仏性説に関心を集中せられ多くの関係論文を發表されたが、その集成を見なかつたのは惜しいことであつた。

(本学教授 仏教学)

〔主要著書〕

日本唯識思想史	昭和十九年	大雅堂	
護法宗唯識考	昭和三十年	法藏館	
判比量論	昭和四十二年	神田氏私刊	
賢聖義略問答の研究	昭和四十五年	神田氏私刊	
日本中世唯識仏教史	昭和五十年	大東出版社	
成唯識論了義燈(国訳一切経)	上巻(共訳)	昭和十四年	大東出版社
	下巻	昭和三十四年	〃
成唯識論述記三・四(国訳一切経)		昭和四十九年	〃
唯識二十論述記		〃	〃